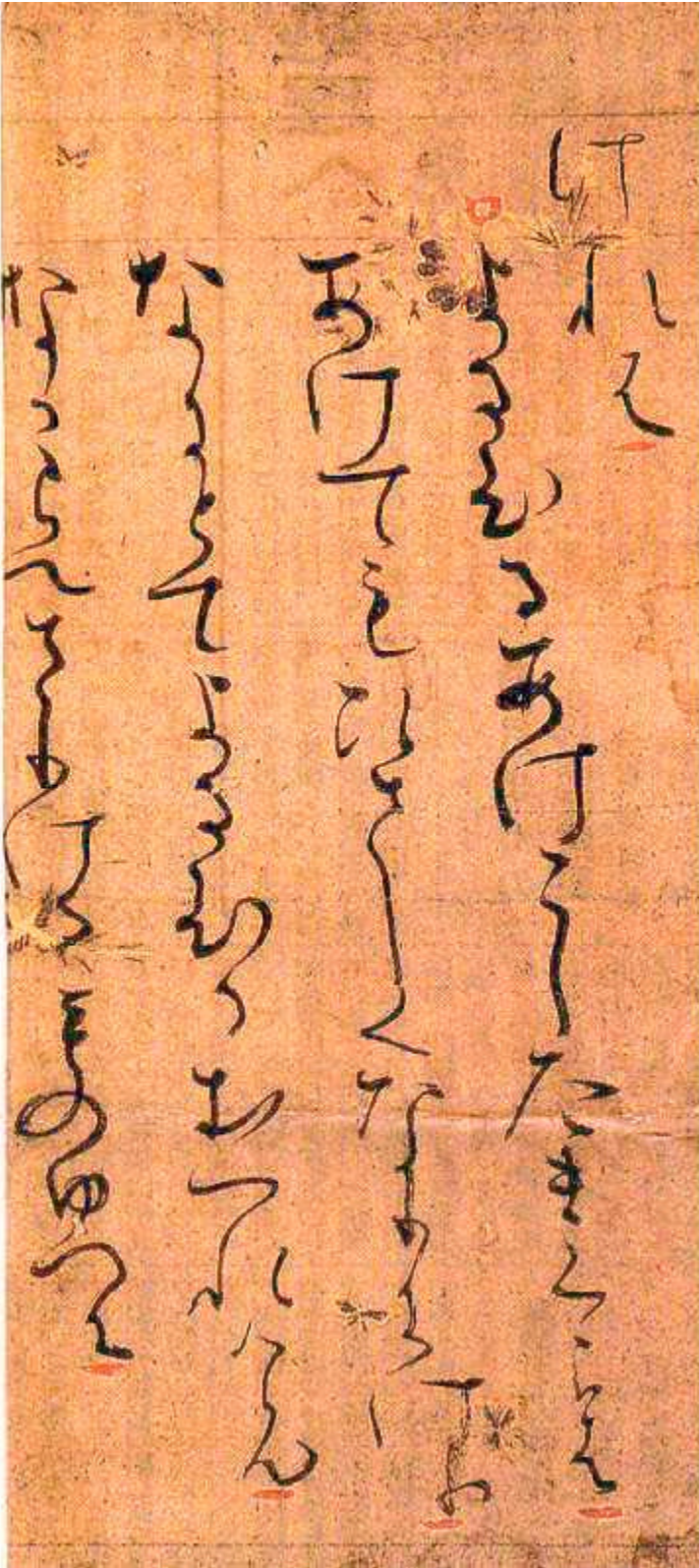


梁塵秘抄 新たな断簡

上野学園大研究、判明 都内古書店で発見



釈文

ければ

よるひるあけこしたまくらは
あけてもひさしくなりにけり
なにとよるひるむつれけむ
なからへさりけるものゆへに

現代語訳（共同研究者、飯島一彦・独協大学教授の論文から）

夜も昼も空けて（誰もいなくなつて）寂しくなつた私の手枕は
誰もいなくなつてからもうずいぶん長い時間が経つてしまつたなあ
あの頃はどつしてあんなに夜も昼も仲睦まじく親しみ合つていたのだらうよ
互いの仲がそんなに長くは続かない（長生きできない）ものだったからね

平安時代後期の今様歌謡集「梁塵秘抄」の断簡が新たに一片、見つかった。上野学園大学（東京都台東区）日本音楽資料室を中心とする研究の結果、これまで編者とされていた後白河法皇（一一二七 - 九二年）がじ

かに筆をとった原本であることが分かった。同資料室の「日本音楽史研究第二号」で研究内容が発表される。

断簡は、同資料室の福島和夫室長が一九九五年に東京都内の古書店で見つけた。横十二・一^が、縦二十六・八^{びし}の雁皮紙に、かつて愛し合った恋人をなつかしむ内容の歌が書かれている。

これまでに確認されている「梁塵秘抄」の断簡には「穂久遜文庫」(個人蔵)の「龍女の今様」、西本願寺所蔵「口伝集」があるが、全二十巻とされるうちのごく一部に過ぎない。

調査に参加した東京国立博物館の古谷稔美術課長が、新たに発見された断簡を、それらと比較したところ、紙質や下絵の意匠などが一致した。さらに、これら三点の筆跡を後白河法皇の自筆「後白河法皇勅報」などと比較した結果、筆跡や字母(かなを表す漢字)の使用頻度が一致することから、三点とも後白河法皇の真筆であることが判明したという。

古谷美術課長は「原本が確定できたことは、後世に書かれた写本などの発見にも役立つ。国文学、美術史、書道史などの研究に重要な意味をもつ」と話している。

梁塵秘抄は平安後期の流行歌謡を集めた本で、当時の世相や風俗が色濃く反映されている。「遊びをせんとや^{うま}生れけむ / 戯^{たはぶ}れせんとや生れけん」の歌が有名。

一首のみだが極めて重要だ

小西甚一・筑波大名誉教授(日本中世文学)の話

新発見を知り大変なことだと思った。後白河法皇の真筆であることは疑えない。書かれていた今様はこれまでに見つかっている「梁塵秘抄」の写本になく、今回初めて確認された。たった一首だが、極めて重要だ。

(朝日新聞 1999.5.20 夕刊 1面, 14面 3版 一部加工しました)